

人との交わりこそ、人を育てる

信金中金月報掲載論文編集委員
齋藤 一郎
(小樽商科大学 大学院商学研究科教授)

新型コロナウイルスの蔓延により、当地北海道でも新型コロナウイルス緊急事態宣言が発出されている。今月号が発行される頃には、まん延防止等重点措置へと移行していると思われるが、それでも人流の抑制は強く要請されるだろう。殊、勤務地である小樽と住まいのある札幌は、特定措置区域に指定されており、日々、リモートワークを余儀なくされている。授業は全てオンライン配信。「2001年宇宙の旅」に出てくるモノリスのように、学生の名前だけがずらりと並んだモニター画面を前に、教室でひとり授業を行う。回線上の制約もあり、ビデオは全てオフ、音声はミュートの状態で、授業はまるで独り言のようで、デジタルストレスは溜まる一方だ。普段は授業をサボりがちな学生たちからも、授業のオンライン配信に関しては不満も多く、一日も早い対面授業の再開が望まれている。菅内閣では、国・地方行政のIT化やDXの推進を目的とした、IT分野を担当するデジタル庁の創設を目論んでいるが、教育のデジタル化には慎重な態度が求められるだろう。人は人と交わる中で人格が陶冶されていくことを思い知らされている今日この頃である。

顧みて、今日わが身があるのも、人との交わり、あるいは人との関係の中で形づくられてきたと思う。高校3年の1月まで、私は歴史学者になりたいと思っていた。いや、祖父母の家が東北大学雨宮キャンパスの近隣にあったことから、「一郎は大きくなったら、ここの大学に入るんだよ」と刷り込まれていたためかもしれない。しかし、そのような夢も、共通一次試験という多肢択一の試験によって、あえなく潰えた。ところが、大人は子供を騙すのが上手い。歴史が好きなら、経済学部へ進むのも一手だと言い出した。経済学部には、経済史関連の科目があり、他学部履修でも歴史を学ぶことはできると。だが、実際に授業を受けてみると、思っていたものとは大きく異なった。中世古城の庭石が東を向いていようと西を向いていようと、そんなことはどうでもよくなった。

そうした中で、村岡俊三教授の世界経済論や大槻幹郎教授の経済計画論、高橋幸雄教授の経営工学特殊講義、武藤滋夫助教授の経営情報論だけは、欠かさず出席していた。自身の関心が歴史から理論へ移っていったというよりは、授業を担当する先生たちに魅せられたからだ。当

時のノートはいまでも手許にある。興味の赴くままに雑食的に授業を選択してきたが、学部も3年になると、所属するゼミを決めなければならない。どうしたものかと考えあぐねていたら、同郷の友人が高橋幸雄ゼミの門を叩くという。付和雷同的に、彼の後ろを追いかけて高橋ゼミに籍を置いてはみたものの、そこでは、オペレーションズリサーチをテーマとしていた。線形計画法？待ち行列？黒板が数式で埋め尽くされる中、ゼミでは、ただひたすらに頭を垂れて、嵐が通り過ぎる忍耐を学んだ。

就職では、アルバイト先の社長さんからの紹介で、福田赳夫元首相から推薦状を頂いた。それを懐に第一志望の北海道東北開発公庫を受けたが、元来のバカさ加減からか、ものの見事に最終面接で落ちた。事の顛末を報告するために、当時赤坂プリンスホテル旧館に事務局を構えていた清和会を訪れたが、その時の福田赳夫元首相の呆れた顔はいまでも忘れられない。

就職に失敗したのは9月中頃。一月後には、多くの企業の内定式が迫っていた。仕方なく指導教官の高橋幸雄先生を伺い、大学院への進学を切り出したら、「お前が受験したら、絶対落としてやる」とありがたいお言葉を頂戴し、その代わりに、第一勧業銀行がお前を欲しがっている旨のお話を頂いた。どうやら、ゼミ恒例の企業見学の際に目を付けられたらしい。当時は、学友というか悪友たちと遊ぶことに夢中で、ほとんどアパートの自室には居なかったもので、第一勧業銀行が誘いをかけてくれていたことに全く気づかなかった。痺れを切らした当時の人事第一部の採用担当者が、ゼミの指導教官に連絡を入れたという次第。就職先に選択の余地がなかった私は、すぐさま第一勧業銀行を訪問した。当の採用担当者にこっそり絞られた後、即日、役員面接が行われ、入行が決まった。昭和60年入行組では最後の内定者であり、人事第一部からははぐれ鳥と呼ばれていた。

バブル経済の崩壊から累積する不良債権の処理に忙殺されていた30代。あらためてわが身の浅学非才を悟り、北海道大学大学院経済学研究科の門を叩いた。当時、北海道大学大学院経済学研究科で金融論を担当されていたのが、濱田康行助教授であった。他大学の先生を介して濱田康行先生を紹介して頂いたが、濱田康行先生はなかなか会って下さらなかった。まだ、社会人大学院生が珍しく、海のものとも山のものともわからない三十路の志願者をどうしたものかと悩まれたに違いない。初めてお目にかかったのは、受験日も間近な頃、大森駅東口の大衆中華店で餃子をつつきながら「面接」を受けた。

その後、修士課程を終えたタイミングで、小樽商科大学商学部助手の公募があり、無給生活に些かの不安を覚えていた妻の後押しもあって応募した。ここまでやってこられたのも、折々に良き人々に巡り会えたことに尽きる。そこには、デジタルな交流にはないリアルな関係があった。